イスラーム世界研究　第10巻（2017年3月）230–248頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 10 (March 2017), pp.230–248

オスマン朝期のスーフィズム思想研究に関する先行研究レビュー
――ニヤーズィー・ムスリーに関する研究動向と今後の展望――

真殿　琴子*

A Survey of Previous Studies on Niyâzî-i Mısrî, a Sufi Poet of 17th Century Ottoman Empire

MADONO Kotoko

This paper aims to examine previous studies on a Sufi poet of 17th century Ottoman Empire, Niyâzî-i Mısrî (d. 1105/1694). Mısrî is mostly known as a Sufi poet (Mutasavvıf şâir) from Malatya, because of the images of him derived from one of his main works, *Dîvân* (collection of poems). He devoted the first half of his life to wandering around Anatolia and the Arabic world seeking a true master, and the remainder to grass-roots activities as a Sufi sheikh. He was affected by the anti-Sufi oriented stagnation movement known as the "Kadızâde movement," and so lived in exile on Limnos Island in his later years. He is counted among the school of Ibn 'Arabī (d. 638/1240), whose thought on the Unity of Existence, Waḥda al-wujūd is well known. Mısrî had also written many articles (risâle) affected by Ibn 'Arabī's ideas. Despite the publishing of many books or translations about Mısrî's works, especially about his *Dîvân*, most studies on him are based on literary or historical methods and only a few studies have focused specifically on his thought from the philosophical perspective by reference to his risâles. In order to uncover Islamic thought in Ottoman Empire and Sufi's agency of reception of the ideological heritage, which was inherited by the school of Ibn 'Arabī, I would like to raise issues concerning the necessity for philosophical analyses on Mısrî's works and suggest a new perspective on Mısrî, as a Sufi thinker.

序論

本稿は、17世紀のオスマン朝期を代表するスーフィーの一人であるニヤーズィー・ムスリー（Niyâzî-i Mısrî, d. 1105/1694）を対象とした、先行研究サーベイの成果と今後の筆者の研究の展望を示すものである。

オスマン朝期のスーフィズム研究は、従来その中心地がトルコ共和国であり、1990年代以降トルコ語によって多くの専門書が発刊されてきた。しかし、その思想研究としての成果は十分ではなく、今後の進歩が待ち望まれるのが現状である。我が国における研究動向を見ても、オスマン朝期の思想研究は近年注目されつつある、新たな研究分野であると言える[1)]。

ムスリーは、トルコにおいて彼の代表的な著作のひとつである『詩集』（*Dîvân*）の著者であるとして、現代でも「スーフィー詩人（Mutasavvıf şâir）」としてよく知られる人物である。彼の詩が今なお人々に親しまれていることは、彼がアナトリア東部のマラティア（Malatya）出身のスーフィーであり、各地を遊行したのち、民衆の間で活発な伝道活動を行ったという経歴にも関係する。一方で、ムスリーは、オスマン語やアラビア語による著作を多く残しており、その記述にはイブン・アラビー（Ibn 'Arabī, d. 638/1240）の存在一性論の影響が色濃く見られ、イブン・アラビー学派（存在一性論学派とも呼ばれる）と呼ぶにふさわしい人物としてその名が挙げられる。しかし、これまで

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1)　東長靖編『オスマン朝思想文化研究――思想家と著作』京都大学イスラーム地域研究センター、2012年; 東長靖・今松泰（共著）『イスラーム神秘思想の輝き――愛と知の探究』山川出版、2016年など。

の研究は、文学研究と歴史研究が中心であり、思想研究の立場からの彼の意義づけは充分に行なわれてこなかった。ムスリーのスーフィー思想家としての側面を照らし出すべく、詩作以外の著作にも光を当てることが必要である。ムスリーの思想を分析することで、イブン・アラビー学派による思想継受の解明とオスマン朝期のスーフィズム思想研究という新たな分野の発展にも寄与できるものと考える。

本稿では、まず第1章においてオスマン朝期のスーフィズムや、ムスリーの生きた17世紀の社会環境に関する研究動向を概観する。17世紀、社会に大きな宗教上の論争をもたらしたカドゥザーデ派（Kadızadeli）の運動は、ムスリー研究においても重要なキーワードである。続いて、第2章でムスリーの生涯や著作に関して整理する。第3章ではムスリーの思想に関して、イブン・アラビーとの関係性や彼の思想文献について触れ、先行研究を紹介し、第4章では以上のことを踏まえ、今後の研究への展望を示したい。

1. 先行研究サーベイ

1-1. オスマン朝期のスーフィズムに関する研究

前章でも触れた通り、オスマン朝期のスーフィズムに関しては、トルコを中心に近年多くの研究がなされてきた。その代表的なものには、Öngören や Kara により時代ごとに集成された研究書[2)]を挙げることができる。共和国建国後、スーフィーやタリーカの活動は公に禁じられることとなったが、近年のイスラーム主義的傾向にも後押しされ、1990年代以降スーフィズム研究はますます活発になりつつある。このような時流において、これらの一連の研究書は、オスマン朝期のスーフィズムの通史を描き出そうとした点で革新的な成果であったと位置づけられる。その内容は総じて、スィルスィラ（系譜）に基づき、各時代のスーフィーの名を列挙し、各タリーカの活動を史実として書き並べることが主であり、基本的には歴史研究である。アナトリアのタリーカの中でも、メヴレヴィー教団やベクタシー教団は、先立ってよく取り上げられてきたが[3)]、それらに限らず、タリーカを組織する支教団や数多くのシャイフたちについて言及したという点において、また、それにより全体像が把握できるようになったという点において、高く評価すべきものである。しかし、これらの研究書はあくまでも入門的あるいは事典的な領域にとどまるものであり、さらに具体的な人物やその生涯や著作などのレファレンスとして、『トルコ宗教財団イスラーム百科事典』（*Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*）や『聖者百科事典』（*Evliyâlar Ansiklopedisi*）なども参照し、補足することが望ましいだろう。

また、オスマン朝治下のスーフィズムに関する包括的な研究書として、Ocak によって編纂された論集『オスマン朝社会におけるスーフィズムとスーフィー――資料・教義・儀式・タリーカ・建築・文学・美術・近代主義』（*Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-*

2） 16世紀から19世紀に関して、マルマラ大学神学部において編まれた4つの研究書（Reşat Öngören, *Osmanlılar'da Tasavvuf: Anadolu'da Sûfiler, Devlet ve Ulemâ (XVI. Yüzyıl)*, İstanbul: İz Yayıncılık, 2000; Necati Yılmaz, *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf: Sûfiler, Devlet ve Ulemâ (XVII. Yüzyıl)*, İstanbul: Osmanlı Araştırmaları Vakfı, 2001; Ramazan Muslu, *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf (18.Yüzyıl)*, İstanbul: İnsan Yayınları, 2003; Hür Mahmut Yücer, *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf (XIX. Yüzyıl)*, İstanbul: İnsan Yayınları, 2003）に加え、近現代のトルコにおけるスーフィズムについては Mustafa Kara, *Metinlerle Günümüz Tasavvuf Hareketleri*, İstanbul: Dergâh Yayınlar, 2002 がある。なお、これらの一連の研究書に関しては、トルコにおける研究動向ならびにレファレンスに関しては、ダニシマズ・イディリス「アナトリア・スーフィズム論の射程――トルコにおけるスーフィズム研究を中心に」『イスラーム世界研究』1(2)、2007年、314–332頁に詳しい。

3） 例えば、Halil Inalcik, *The Ottoman Empire: The Classical Age 1300–1600*, Norman Itzkowitz & Colin Imber (tr.), New York & Washington: Weidenfeld & Nicolson, 1973; Mustafa Kara, "Mezhepler ve Tarikatlar," *Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Türkiye Ansiklopedisi*, cilt 4, İletişim Yayınları, 1985, pp. 977–994 など。

Architecture-Literature and Fine Arts-Modernism）は参照に値する重要な一書である。この研究書は欧米の研究者との共同出版であり、英語版（一部フランス語を含む）[4]とトルコ語[5]でそれぞれ2005年に初版が出版されている。タイトルからも明らかな通り、歴史学や美術など様々なディシプリンに基づいたテーマがひとつに集められている。特にこの中では、オスマン朝期のスーフィーへのイブン・アラビーの影響を示唆した、Uludağ[6]とChodiewicz[7]の論考に注目したい。イブン・アラビーの思想がオスマン朝社会に広く受容され、彼の代表的な思想である存在一性論や完全人間論が多くのスーフィー思想家によって展開されたことは、Tahralıの1994年の論文[8]によって先駆的に示された。Tahralıの研究は、オスマン朝におけるイブン・アラビー学派の系譜が具体的な人物名と共にリスト化されたという点で画期的な成果をもたらした。その成果は、その後の1999年の英語版の論文[9]や東長による『イブン・アラビー学派文献目録』[10]に結びついている。具体的な人物名を挙げていくスタイルは、Tahralıの2つの論文や先に述べたÖngörenらの一連の研究書にも見られるが、Uludağも同様に具体的な人物名を並べながら、オスマン朝思想を形作ったオスマン朝以前のイブン・アラビーの存在一性論を含めたスーフィー思想や、タリーカの影響や活動などについて分析している。Chodiewiczはオスマン朝期にイブン・アラビーの思想継受を果たした人物を年代順に取り上げ、各々の思想上の特徴やイスラーム思想史上に残した意義について論じている。オスマン朝期の初期から共和国樹立後に至るまで、特にイブン・アラビー学派の重要な人物が網羅的に紹介されている点のみならず、各人についての西欧における研究動向を知る上でもトルコでの一連の研究に並ぶ重要な研究である。

1-2. 17世紀オスマン朝期のスーフィズムに関する研究

17世紀以前のオスマン朝社会において、国家とスーフィーの関係は概ね良好であったという見解[11]がある一方で、帝国建国後から国家と辺境の遊牧民たち[12]との間で宗教的かつ政治的な対立関係があり、「異端」的なスーフィーたちによって国家に対する反乱が起きたとする史実[13]はすでに知られたものである。その典型的な例は、ベドレッディン・スィマーヴィー（Bedreddîn Simâvî, d. 823/1420）によってオスマン朝政権に対して起こされた大規模な反乱である。彼は宗教運動の象徴的な指導者としてのみならず、イブン・アラビーの存在一性論に基づき、神秘思想を打ち立てたスーフィーでもあった[14]。このような政治的な面での対立は見られるものの、ウラマーとスー

4）Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-Architecture Literature and Fine Arts-Modernism*, Ankara: Sarıyıldız Basımevi, 2005.

5）Ahmet Yaşar Ocak (haz.), *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf ve Sufiler Kaynaklar-Doktrin-Ayin ve Erkan-Tarikatlar-Edebiyat-Mimari-Ekonografi-Modernizm*, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2005; repr. Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2014.

6）Süleyman Uludağ, "Basic Souces for Mystical Thought in the Ottoman Period," Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society*, pp. 21–49.

7）Michel Chodokiewicz, "La réception de la doctorine d'Ibn 'Arabī dans le monde ottoman," Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society*, pp. 97–120.

8）Mustafa Tahralı, "Muhyiddin İbn Arabi ve Türkiye'ye Te'sirleri," *Kubbealtı Akademi Mecmuası* 23(1), 1994, pp. 26–35.

9）Mustafa Tahralı, "A General Outline of the Influence of Ibn 'Arabî on the Ottoman Era," *The Journal of Muhyiddin Ibn 'Arabi Society* 26, 1999, pp. 43–54.

10）東長靖・中西竜也編『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター、2010年。

11）Mustafa Aşkar, "Tarikat-Devlet İlişkisi, Kadızâdeli ve Meşâyıh Tartışmaları Açısından Niyazî-i Mısrî ve Döneme Etkileri," *Tasavvuf* 1, 1999, pp. 51–52.

12）トルコ系遊牧民とスーフィーの関係については、今松泰『イスラーム神秘思想の輝き――愛と知の探究』山川出版社、2016年、53–55頁を参照。

13）Inalcik, *op. cit.*, pp. 186–202.

14）今松、前掲書、71–72頁。

フィーたちとの親和性は高く、ウラマーでありスーフィーでもある者も多く存在した[15]ことからも分かるように、スーフィズム思想やスーフィーたちの活動はオスマン朝社会全体に広く受け入れられていたものと見られる。

ムスリーの生きた17世紀のオスマン朝社会においても、16世紀に引き続きタリーカの活動は目まぐるしく広がっていったものとされる。支教団と教団拠点の増加に伴い、ムリード（弟子）が増加し、テッケやデルギャーフと呼ばれる修行場が急速に増加した。その点では、オスマン朝のスーフィズムの歴史の中でも、輝かしい時代であったと言われる[16]。また、文学史においても、テッケなどの各拠点に属するスーフィーたちを主体に、“スーフィー文学（tasavvufî edebiyat）”が確立した時代であった。オスマン詩の確立期でもある17世紀はそれ以前の時代と比べて、トルコ語起源の語彙が定着し始め、ペルシア詩の影響が弱まったと見られている[17]。その一方で17世紀は、近現代の反スーフィズム的な傾向に先立つ、カドゥザーデ派の運動が起きた時代として、ひとつの転換期でもあった。この運動は、メフメト・カドゥザーデ（Kadızâde Mehmed Efendi, d. 1045/1635）の提唱により、イスタンブルにおいて始まり、カドゥザーデの死後も18世紀に入るまで続いた、「イスラーム復興主義」的な運動として知られる[18]。カドゥザーデ派は、タバコやコーヒーなどのビドアの全体を非難し、特にスーフィーとタリーカを攻撃対象とした。思想面ではイブン・アラビーの思想、タリーカではハルヴェティー教団とメヴレヴィー教団が特に非難の対象となった[19]。この運動は、カドゥザーデの死後も続き、1077/1666年にはセマーやデヴラーンの禁止やその翌年には墓参詣の禁止が発令されるに至った。加えて、思想界の論争が社会問題化する事態を招き、例えばズィクルや聖墓巡礼は異端かという問題などがウラマーやスーフィーたちの間で活発に議論された[20]。ただし、近年この運動はスーフィー対反スーフィーといった単純な二項対立でとらえることができないことが指摘され始めており[21]、政権側も常に反スーフィー派を支持していた訳ではなく、その実態に関してはより精緻な分析が要されるのが現状である。

Öcalanによる『ブルサにおけるタサウウフ文化（17世紀）』（*Bursa'da Tasavvuf Kültürü* (*XVII. Yüzyıl*)）は、イスタンブルに程近い都市であるブルサを中心に、17世紀を代表するタリーカやスーフィーたちの活動をまとめたものである。本書の前半部は、ブルサに位置した各デルギャーフに関連するスーフィーたちの人名録になっており、人物の概要やそれぞれの相関関係が示され、後半部ではシャイフたちの具体的な活動について紹介される。特に、シャイフたちの社会生活についてはその収入源や経済活動[22]について、さらにブルサのデルギャーフやそれに併設する図書館で読まれていた著作物[23]についても言及があり、大変興味深い。カドゥザーデ派の運動のブルサへの波及は、イスタンブルに劣らず、ブルサでもムスリーに代表されるようなスーフィーたちによって活

15）ダニシマズ、前掲論文、318–319頁。

16）Hasan Basri Öcalan, *Bursa'da Tasavvuf Kültürü (XVII. Yüzyıl)*, Bursa: Gaye Kitabevi, 2000, p. 37.

17）*Ibid.*, pp. 22–36.

18）カドゥザーデ派の運動については、Madeline C. Zilfi, “The Kadizadelis: Discordant Revivalism in Seventeenth-Century Istanbul,” *Journal of Near Eastern Studies*, Vol. 45, No. 4, 1986, pp. 251–269; Semiramiş Çavuşoğlu, “The Ḳāḍīzādeli Movement: An Attempt of Şerī‘at-minded Reform in the Ottoman Empire,” Ph. D. diss. Princeton University, 1990 などを参照。

19）今松、前掲書、95–100頁。

20）Mustafa Kara, *Niyazi-î Mısrî*. Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1994, pp. 5–6.

21）山本直輝「イマーム・ビルギヴィーのスーフィズム観」『イスラーム世界研究』8、2015年、225頁。

22）Öcalan, *op. cit.*, pp. 228–236.

23）*Ibid.*, pp. 250–269.

発な論争が引き起こされた[24]が、そのような厳しい状況下においても、ブルサでは60近いテッケやデルギャーフが存在し、それらを民衆教化や芸術・文学などの文化の中心として、スーフィーたちの活動は継続的に行なわれていたことが本書によって知られる。スーフィズムをめぐる17世紀のオスマン朝社会の実像を知る上でも、ムスリー研究においても、本書は重要な示唆に富むものである。

1-3. ニヤーズィー・ムスリーに関する研究

ムスリーに関する個別研究も、トルコ共和国下におけるスーフィズムの研究動向と同様、その多くは1990年代以降のものである。それ以前の時代に著されたもののうち西欧語で読める文献として、最も古いものは、ロシアの東洋学者であるGordlevskijによって1929年に著された研究である[25]。それに続き、*Encyclopedia of Islam*（旧版）に収録された、ドイツの東洋学者Babingerによるムスリーの概説がある[26]。この中で、Babingerは、歴史家でもある文人ディミトリエ・カンテミール（Demetrius Kantemir）[27]による「ニヤーズィーはキリスト教徒であった」という記述を紹介しているが、その判断に至った理由は今後慎重に検証する必要性がある。さらに、Babingerの弟子にあたるGlockはムスリーの生涯と*Dîvân*に関する博士論文を残しており、58の詩をドイツ語に翻訳している[28]。

トルコにおける研究については、概して方法論的な厳密さを欠いており、無批判に聖者伝などの伝記的文献に拠ることが多く、歴史的な背景に関して表面的な理解に陥りがちであるという指摘があるように[29]、その出典には注意が必要とされる。多くの先行研究を比較しながら検証するのが賢明である。

まず、古いものなかで特に重要なものとしては、Gölpınarlıの1972年に発表された論文[30]がある。ムスリーの生涯や著作、思想、聖者伝（menkıbeleri）、彼の起こした奇蹟、ムスリーの支持者や批判者、彼の及ぼした影響などについて触れたこの論文は、ムスリーの著作集（*Mecmûa*）のブルサ古文書館（BEEK: Bursa Eski Eserler Kütüphanesi）に収蔵されているバージョンを参照しているという点で画期的なものであった[31]。

次に英語で読めるものとして最も重要なものは、1999年にまとめられたTerzioğluの博士論文である。歴史学を専門とする著者が、ムスリーの思想的立場を含めた人物像ならびに宗教上の論争が展開した17世紀のオスマン朝社会との関係性を分析したものである。ムスリーの政治活動家的な側面にも言及する一方で、各思想文献の特徴を捉えた上で彼の精神世界についても考察がなされており、歴史学の域を超えた、ムスリーとムスリーを取り巻く社会環境や人物に関する俯瞰的な研究

24）Öcalan, *op. cit.*, pp. 269–285.

25）V. A. Gordlevskij, “Tarikat Misri Niyazi,” *Dokladi Akademii Nauk SSSR*, 1929, pp. 153–163.

26）新版もこれを再録したものである。

27）この人物はモルダヴィア（ルーマニア）の貴族の生まれで、1688年から22年間をイスタンブルで過ごしている。アフメト2世にもその才能を認められ、歴史書、地理誌、哲学書など多くの著作を残した。

28）Irmgard Glock, “Niyāzī al-Miṣrī: Ein Beitrag zur islamischen Mystik Kleinasiens im 17. Jahrhundert,” Ph. D. diss. Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn, 1951.

29）Derin Terzioğlu, “Sufi and Dissident in the Ottoman Empire: Niyāzī-i Miṣrī (1618–1694),” Ph. D. diss, Harvard University, 1999, p. 12.

30）Abdülbaki Gölpınarlı, “Niyazî-i Mısrî,” *Şarkiyat Mecmuası* 7, İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Basımevi, 1972, pp. 183–226.

31）*Mecmûa*には2つのバージョンが存在する。BEEK版とスレイマニエ図書館（Süleymaniye Kütüphanesi）版である。前者にはムスリーが生前過ごしたリムニ島での記録が収録されており、後者には結婚や娘の誕生の日付の記載が見られるなど、内容は異なる（Kara, *op. cit.*, 1994, p. 3）。

として評価することができる。

他にトルコ語以外で書かれている、西欧におけるムスリーを対象とした研究では、その関心が特にムスリーと同時代のユダヤ教徒との関連性に向けられていることは興味深い傾向である。17世紀はオスマン朝治下においてサバタイ・ツヴィ（Sabbatai Zevi, d. 1087/1676）を中心にユダヤ・メシア運動が興った時代でもあり、そのような風潮とムスリーとの関係性を指摘する研究もある[32)]。Terzioğlu はムスリー思想の特徴を、預言者論（prophetology）と終末論（eschatology）の２つにあることを示しており[33)]、当時のユダヤ神秘主義やメシア信仰との思想的な関連性は今後充分精査されるべきテーマに数えられる。

最後に、Aşkar の 2004 年に初版が発刊された研究書[34)]を挙げたい。Aşkar は、ムスリー研究における中心的な研究者の一人であり、『イスラーム百科事典』（*Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*）のムスリーの項目は彼が担当している[35)]。彼の生涯や著作に関するレファレンスにとどまらず、思想研究としての発展を見込んだものとしても、具体的な諸々のテーマ研究につながる初歩的な文献として利用価値が高い。ただし、本書の参考文献リストには、前述の Terzioğlu の博士論文を含めた西欧における研究成果は含まれておらず、参照すべき研究であると見込まれていない可能性が高い。上記にも述べたように、ムスリー研究についても、典拠の大部分を先達からもたらされる聖者伝や列伝などの伝記的文献に従うことが多く、特に西欧における研究に対する考察は積極的に行なわれていない。

そして、ムスリーに関する研究動向を概観すると、その関心の中心は彼の詩（*Dîvân*）であることが分かる。今日でも一般向けのものも含めて多くの翻訳と注解（şerh）が発行されている[36)]。ディーヴァーンの研究は基本的には文学研究の枠組みに属するが、スーフィズム思想の文脈でその詩を解釈するという手法はほぼすべてに共通しており、純粋な文学研究ともある意味で性質が異なる。以上のように、ムスリーに関する研究は、トルコにおいては多く存在するものの、その手法や対象は限られたものである。言語・地域の枠を超えた研究成果を踏まえ、新たな視点を積極的に取り入れていくことが必要であろう。

2. ムスリーの生涯と著作

2-1. ムスリーの生涯[37)]と人物像

ムスリーの生涯についての第一の典拠は、彼の日記や『叡智の食卓』（*Mawā'id al-'Irfān*）などにおいて、自らの生涯について記している箇所である。彼の日記には年号も書き残されており、それ

32）ムスリーと 17 世紀オスマン朝治下のユダヤ教徒との関係に関しては、以下の３つの先行研究がある。WL. Gordlevsky, "Zur Frage über die "Dönme" (Die Roile der Juden in den Religionssekten Vorderasiens)," *Islamica* 2: 2, Leipzig, 1926, pp. 200–218; Paul B. Fenton, "Shabbatay Şebi and his Muslim Contemporary Muhammad an-Niyazi," *Approaches to Judaism in Medieval Times* 3, David R. Blumenthal (ed.), Atlanta, Georgia: Scholars Press, 1988, pp. 81–88. トルコ語のものでは、Ilgaz Zorlu, "Sabetaycılık ve Osmanlı Mistisizmi," *Evet, Ben Selamikliyim: Türkiye Sabetaycılığı*, Istanbul: Belge, 1998, pp. 40–45 がある。Fenton は、ほかにムスリーの著述からキリスト教とユダヤ教の影響を見出した研究成果も発表している（Paul B. Fenton, "Christians and Jews in Niyazi Mısrî's Writings," *Uluslararası Bursa Tasavvuf Kültürü Sempozyumu* IV, 2005, vol. IV, pp. 149–164）。

33）Terzioğlu, *op. cit.*, 1999, p. 373.

34）Mustafa Aşkar, *Niyazi-î Mısrî-Hayatı, Eserleri, Görüşleri*, İstanbul: İnsan Yayınları, 2011.

35）Mustafa Aşkar, "Niyâzî-i Mısrî," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, cilt. 33, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü, 2007, pp. 166–169.

36）近年発刊されたものには次のようなものがある。Niyâzî-i Mısrî, *Niyâzî-i Mısrî Halvetî Dîvân-ı İlâhiyât*, haz: Mustafa Tatcı, İstanbul: H Yayınları, 2015; M. Efdal Emre, *Niyâzî-i Mısrî Dîvânı ve Şerhi*, İstanbul: Gelenek Yayıncılık; Özkan Günal, *Vahdet Deryası 1: Niyâzî-i Mısrî Divan Yorumları*, Bursa: Emek Yayınevi, 2015.

37）ムスリーの生涯について、本稿では主に Aşkar, *op. cit.*, pp. 61–138 を参照した。

によって彼の生涯はある程度明らかになっている。第二に、Mustafa Rakım Efendi（d. 1163/1750）の *Vâkıât-ı Hazret-i Mısrî* と、Mustafa Lûtfî Efendi（d. 1321/1903）の *Tuhftetü'l-Asrî fî Menâkıbi'l-Mısrî*[38] と Mehmed Şemseddin Efendi の *Gülzar-ı Mısrî* である[39]。主にこれらの列伝（聖者伝）を照合することは各研究者に共通しており、その上で発展的な検証が重ねられている。

ニヤーズィー・ムスリーは、メフメト（Mehmed）[40]の名で、1027/1618年マラティア（Malatya）[41]にある町、アスポズィ（Aspozi）で生まれた[42]。幼い頃から、ナクシュバンディー教団に属するスーフィーである父親のアリ・チェレビー（Ali Çelebi）から薫陶を受ける。メクテプの初等クラスで弟のアフメト（Ahmed Efendi）[43]とともにイスラーム学の基礎やクルアーンに関する教育を受ける。その後、ハルヴェティー教団のシャイフであるヒュセイン（Şeyh Hüseyin el-Halvetî）に師事する。師がマラティアを去ったのち、ムスリーもさらなる学知を求めディヤルバクル（Diyarbakır）へ移った。1048/1638年頃のことである。以後、青年期のムスリーは拠点を転々と移し、各地を旅することになる。

ディヤルバクルで1年を過ごしたのち、マルディンで1年、その後1050/1640年にエジプト（ムスル）へと辿りつく。ムスリーと呼ばれるのはこのエジプト滞在に由来する。エジプトでは、アレクサンドリア（İskenderiye）のカーディリー教団のシャイフ、イブラヒム（İbrahim Efendi）に師事し、薫陶を受ける。アズハル・モスクで講義を受けながら、テッケで眠りにつくという安定した生活を送っていたことを自身の著作に記している[44]。スーフィズムの教えの傍らで一般的なイスラーム学の素養を磨きながら、自身も説教台に立つようになった。しかし、自身が最も望んでいたスーフィズムの教えから遠ざかっていることをシャイフから指摘され、アズハル・モスクから去ることを勧められる。その後、夢の中でカーディリー教団の創始者であるアブドゥル・カーディル・ジーラーニーから忠言を受けたムスリーは、その言葉に従い、1053/1644年エジプトを発ち、新たな師を求めて再びアナトリアへ渡った。

その後、1056/1646年イスタンブルへ、そしてブルサへ至るも、再び夢の宣託に従い、アナトリア各地を巡った。そして、アナトリア西部のウシャク（Uşak）に到達したムスリーは、シャイフ・メフメト・ハルヴェティー（Şeyh Mehmed Halvetî）と、彼がハリーフェとして仕える、エルマル（Elmalı）出身のハルヴェティー教団のシャイフであるウンミー・スィナン（Ümmî Sinân, d. 1067/1657）と出会う。ムスリーはウンミー・スィナンこそが自らの真の師であることを確信し、1057/1647年ちょうど30歳になる頃彼に師事し始める。エルマルにおいてウンミー・スィナンのもとで9年間にわたり薫陶を受けながら、自らもイマーム職を務め、民衆教化に尽力した。

38）解説付きで現代トルコ語訳が刊行されている（Mustafa Lûtfî Efendi, *Bir Mısrî Şeyhinin Kaleminden Hazret-i Niyâzî-i Mısrî*, haz: Aliye Uzunlar, İstanbul: Revak Kitabevi, 2013）。

39）Kara, *op. cit.*, pp. 1–3.

40）実際は Muhammed であるが、転じて今日のトルコ語では Mehmed と表記され、発音上は Mehmet とされる。Niyazî（意味は「希求する者」）は筆名である。

41）オスマン朝治下のマラティアに関しては、三沢伸生「オスマン朝治下のアナトリアの都市――東アナトリアのマラティア地域の研究から」『イスラム世界』37/38、1992年、61–84頁を参照。

42）マラティアで生まれたことは、ムスリー自身が著作に記しているが、どの村 / 町でうまれたかどうかについては議論がある（Aşkar, *op. cit.*, pp. 62–67）。本稿では、Mustafa Aşkar, "Niyâzî-i Mısrî," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, cilt. 33, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü, 2007, p. 166 に従った。

43）兄弟は4人いたと伝えられるが、ムスリー自身はアフメト以外のことは何も記録を残していない。彼の母親に関しても同様である。

44）Aşkar, *op. cit.*, p. 73. その他、ムスリーのエジプト滞在期に関しては、Paul Ballanfat, "Nîyâzî Mısrî : l'Égypte, station mystique pour un soufi turc du XVIIe siècle," Rachida Chih et Catherine Mayeur-Jaouen (eds.), *Le soufisme à l'époque ottomane XVIe–XVIIIe siècle*, Cairo : Institut Français d'Archéologie Orientale, 2010, pp. 249–273.

1066/1656 年、ウンミー・スィナンのハリーフェに認められたのち、ウシャクやチャル、キュタヒヤへと拠点を移す。1072/1661 年に数人の弟子とともにブルサに移住するが、この頃から徐々にカドゥザーデ派の影響を受けるようになる。政治的に不遇な局面にも耐える反面、私生活ではちょうどこの頃、弟子の妹にあたる女性と結婚し、ファトマとチェレビー・アリという名の 2 人の子供を授かる[45]。

カドゥザーデ派の影響により、1074/1666 年ズィクルやデヴラーンの禁止が発令されたにも関わらず、ムスリーはテッケにおいて、それらを継続して実践しつづけた。ムスリーは禁止令の発端である第 3 次カドゥザーデ派の運動の主導者、ヴァニー・メフメト（Vanî Mehmed, d. 1096/1685）への強い反感を自らの日記において書き表している。スーフィーたちへ規制の波が押し寄せる最中、時の宰相であったキョプリュリュ・ファズル・アフメト・パシャ（Köprülü Fazıl Ahmed Paşa, d. 1087/1676）[46]はムスリーをエディルネへと召喚し、客人として約 40 日間迎え入れた。その後、ムスリーはイスタンブルにおいて行った説教のなかで、ズィクルとデヴラーン禁止の解除を訴えた。この出来事は、時のスルタンであったメフメト 4 世（在位 1058/1648–1099/1687）に影響を与え、ズィクル・デヴラーンの解放への契機となったと伝えられる。これらの一連の出来事は、ムスリーの政治的立場を検討する上でも重要な意味を持っている。

1080/1670 年に、ブルサに自身のデルギャーフ[47]を建設し、活動の中心をブルサに移すも、説教中に民衆に向かって政権の堕落を糾弾したとして、1083/1672 年ロドス（Rodos）島への流罪が課せられる。9 か月後ブルサに戻るも、再び説教中の政治的な発言や思想上の問題点が摘発され、1085/1674 年に投獄され、1088/1677 年にはリムニ（Limni）島に流される。刑期 2 年を終えたのちもリムニ島に残り、弟子たちとともに精力的に活動を続け、計 15 年ほど過ごした。アフメト 2 世（在位 1102/1691–1106/1695）の命令により 1103/1692 年再びブルサに戻った翌年、オーストリア遠征に参戦すべくムスリーのもとに集まった 200 人の弟子と共にエディルネに至る。この折のムスリーらによる援軍の申し出を政権側は拒否したが、ムスリーはそれに従わず進軍を試みた。この出来事から、政権側への反乱を予期した宰相ボゾクル・ムスタファ・パシャ（Bozoklu Mustafa Paşa, d. 1110/1698）は、ムスリーに対し再びリムニ島への流罪を命じ、ムスリーは翌年の 1105/1694 年、リムニ島で最期を迎えることとなった[48]。

ムスリーの人物像は以下のように集約できる。それは、(1) 生涯のうち、各地を遊行し真の師を求めた前半部に見られるような、修行者としてのスーフィー、(2) 後半部において、とくに顕著な、民衆教化や伝道活動に熱心なシャイフ（ムルシド[49]）、(3) カドゥザーデ派の運動に抵抗し、政権批判によって流罪に処されたという活動家的側面の 3 点である。(1) に関して、スーフィーの修行道を意味する言葉である sülûk（旅）やその途上において見る rüyâ/vâkıa（夢）は、ムスリーの生涯や修

45）ムスリー自身の記録とその後の検証によって、3 回結婚したということが判明している。それに関しては、Aşkar, *op. cit.*, 2011, p. 97.

46）この人物は、ムスリーのデルギャーフの建設の際に、資金提供していることからも分かるように、ムスリーに好意的であった。しかし、ムスリーはそれらの政府からの援助を受け入れなかった（Öcalan, *op. cit.*, p. 105）。

47）ブルサのムスリーのデルギャーフに関しては、Salih Çift, “Bursa’da Bir Mısrî Dergâh ve Son Postişîni: Seyyid Baba Tekkesi ve Şeyh Sâbit Efeindi,” *Uludağ Üniversitesi İlahiyat Facültesi Dergisi* 13(2), 2004, pp. 197–214.

48）リムニ島のムスリーの聖墓やテッケ、リムニ島でのムスリーの足跡に関しては Olga Matzari, “The Türbe and Tekke of Niyazi Misri in Lemnos,” Evangelia Balta, Georgios Salakidis & Thoharis Stavrides (eds.), *Festschrift in Honor of Ioannis P. Theocharides Studies on Ottoman Cyprus* vol. 2, Istanbul: The ISIS Press, 2014, pp. 333–362; Heath W. Lowry, *Historical Vestiges of Niyâzî Mısrî’s Presence on the Island of Limnos (Niyâzî Mısrî’nin Limnos Adası’nda Bulunan Tarihi İzleri)*, Kıvan Tanrıyar (tr.), Istanbul: Bahçeşehir University Press, 2011.

49）スーフィーの修行道における師弟関係で、導師はムルシド（murshid）、それに対して弟子はムリード（murīd）と呼ばれる。

行論において象徴的な意味を持つキーワードであり、それらをもとにした研究もいくつか存在する[50]。さらに、(3) に関して、ムスリーの政治的な立場に着眼点を置いた研究[51]も、ムスリー研究として中心ではないものの、政治的主張がイブン・アラビーの存在一性論に裏付けられている点は見過ごせない[52]。そして、ムスリー研究において最も重要視されるのが (2) の人物像であり、例えばムスリーの著作では民衆のレベルに合わせた平易なトルコ語が用いられているという主張[53]はこのような人物像を根拠にしており、またムスリー自身も著作のなかで、ムリードに対するムルシドの必要性とムルシドの役割について説明している[54]。知識人的なスーフィーというよりは、むしろより民衆的・実践的なスーフィーであったことは、彼の生涯を見ても分かる通りであり、概ねどの先行研究においても強調されてきた点である。

2-2.　ムスリーの著作

ムスリーは30を超える著作を残していると見られている[55]。アラビア語とオスマン語で著作を残したが、その多くがオスマン語のものである。代表的なものを以下に列挙する。

アラビア語――

1. *Mawā'id al-'Irfān*『叡智の食卓』
2. *Tasbī' Qaṣīda al-Burda*『7つの〔預言者ムハンマドに対する〕頌詩』
3. *Tafsīr Fātiḥa al-Kitāb*『クルアーン「開端」章のタフスィール（解釈）』
4. *al-Dawra al-'Arshīya*『玉座の転回』
5. *Majālis*『集会』

オスマン語――

1. *Dîvân*『詩集』
2. *Risâle-i Esile ve Ecvide-i Mutasavvıfâne*『スーフィー的な諸々の問いと答えについての論考』
3. *Tabîrâtü'l-Vâkıât*『夢の解釈』
4. *Risâle-i Hasaneyn*『ハサンとフセイン論考』
5. *Risâle-i Vahdetü'l-Vücûd*（*Tuhfetü'l-Uşşâk*）『存在一性論考（愛する者たちへの贈り物）』
6. *Risâle-i Arşîye*『玉座論考』
7. *Risâle-i İâde*『復活論考』
8. *Risâle-i Nokta*『点に関する論考』

50）Muharrem Çakmak, "Niyazî-i Mısrî'nin 'Etvâr-ı Seb'a' adlı Risâlesi'nde Seyr ü Sülûk'un Evrelerinde Görülen Rüyâ/Vâkıât," *Tukish Studies* 11(5), 2016, pp. 136–158; Derin Terzioğlu, "Mecmûa-i Şeyh Mısrî: On Yedinci Yüzyıl Ortalarında Anadolu'da Bir Derviş Sülûkunu Tamamlarken Neler Okuyup Yazdı?" haz: Hatice Aynur, Müjgân Çakır, Hanife Koncu, Selim S. Kuru, Ali Emre Özyıldırım, *Eski Türk Edebiyatı Çalışmaları VII: Mecmûa: Osmanlı Edebiyatının Kırkambarı*, İstanbul: Turkuaz Yayınları, 2012, pp. 291–321; Kadriye Yılmaz & Kamile Çetin, "Rüyalar ve Niyazî-i Mısrî'nin Ta'bîrâtü'l-Vâkı'ât Adlı Eserinde Rüyaların Dili," *Turkish Studies: International Periodical for the Languages, Literature and History of Turkish or Turkic* 2/4, 2007, pp. 1066–1076; Mustafa Tatcı, "Niyazî-i Mısrî'nin Tasavvufî Bir Tabirnamesi," *Türk Folklor Araştırmaları*, Ankara, 1989, pp. 85–96.

51）Terzioğlu, *op. cit.*, 1999, pp. 277–354.

52）Özkan Öztürk, *Siyaset ve Tasavvuf Osmanlı Siyasi Düşüncesinde Tasavvufun Tezahürleri*. İstanbul: Dergâh Yayınları, 2015, pp. 258, 302–305, 511–516.

53）Kenan Erdoğan, *Niyazi-î Mısrî: Hayatı, Edebî Kişiliği, Eserleri ve Divanı (Tenkitli Metin)*. Ankara: Akçağ Yayınları, 1998, pp. 107–119. などに示される。

54）Aşkar, *op. cit.*, 2011, pp. 252–255.

55）著作の多くがいくつかの小論（リサーレ）からなるため正確な数字ははっきりしない（Aşkar, *op. cit.*, 2007, p. 166）。

9. *Risâle-i Devrân-ı Sûfîye*『スーフィーのデヴラーン（旋回）に関する論考』
10. *Risâle-i Nefîse*『卓越した者に関する論考』
11. *Şerh-i Esmâü'l-Hüsnâ*『最も美しい〔神の〕諸名の解釈（注釈書）』
12. *Şerh-i Nutk-ı Yûnus Emre*『ユヌス・エムレの言葉の解釈（注釈書）』
13. *Tefsîr-i Tekâsür Sûresi*『「数の競い合い」（クルアーン 102 章）のタフスィール』

先にも述べたように、代表的な著作として、第一に挙げられるのがオスマン語による『詩集』*Dîvân*（*Dîvân-ı İlâhîyât*）である。ムスリーは詩作に関して、ユヌス・エムレ（d. 720/1320）の強い影響下にあったと見られており[56]、ユヌス・エムレの注釈書（şerh）である『ユヌス・エムレの言葉の解釈』（*Şerh-i Nutk-ı Yûnus Emre*）も彼の主要な著作のひとつとしてよく知られる[57]。*Dîvân* の翻訳書（ラテン文字への転写版も含む）やそれに伴う研究の数は、ムスリー研究においては最も多い。そのほか多数のリサーレ（論考）が存在するが、個別的な研究の対象になることは、ディーヴァーンに比べると圧倒的に少なく、翻訳の数も種類も少ない[58]。散文を対象にしたものでは、『叡智の食卓』（*Mawā'id al-'Irfān*）がもっともよく引用される。

3. イブン・アラビー学派の思想家としてのニヤーズィー・ムスリー

3-1. イブン・アラビーとの関係性

ムスリーはイブン・アラビー学派に名を連ね[59]、存在一性論を受け継いだスーフィーである。ムスリー研究において多数を占めるディーヴァーンの研究においても、彼の思想的背景としてイブン・アラビーの存在一性論が基礎になっていることは共通の前提となっている。

ムスリーはイブン・アラビー学派に名を連ねるスーフィーであるものの、イブン・アラビーの『マッカ啓示』や『叡智の台座』に対する直接の注釈書は残していない。それにも関わらず、ムスリーがイブン・アラビー学派（存在一性論者）であると言われる具体的な根拠のひとつには、ムスリーの属する系譜がある。彼の師事したウンミー・スィナンやその周辺人物はイブン・アラビーあるいはベドレッディンに関する記述を残している[60]。1-2. で述べたように、ベドレッディンはイブン・アラビーの思想的系譜に連なる人物であり、存在一性論の立場から独自の思想を展開した人物である。さらに Terzioğlu は、ムスリーがハルヴェティー教団の中心部（orta kol）として知られるアフメディー教団（Ahmedîye）の創始者であり、イブン・アラビーやその弟子たちの教えに強く影響を受けたイイトバシュ（Yiğitbaşı Ahmed Şemseddîn, d. 910/1504）の系譜に連なることと、ムスリーがしばしば彼の注釈とイブン・アラビーの作品を並置させていることを指摘している[61]。

56）Aşkar, *op. cit.*, 2011, pp. 151–156.

57）ユヌス・エムレについてはトルコにおいて膨大な数のレファレンスが存在するが、近年発刊されたもので、ユヌス・エムレの詩について、ムスリーの注釈書や詩を参照しながら、その神秘主義思想を分析した優れた解説書として、Mustafa Tatcı, *Yûnus Emre Yorumları; İştin Ey Yârenler*, İstanbul: H Yayınları, 2015 (2012) がある。

58）先駆的に諸々のリサーレを扱った研究書として、ムスリーの生涯に合わせて、各リサーレの抜粋訳を簡潔な説明と共に紹介した Baha Doğramacı, *Niyazî-i Mısrî Hayatı ve Eserleri*. Ankara: Kadıoğlu Matbaası, 1988 がある。

59）Tahralı, *op. cit.*, 1994, p. 34; 東長・中西、前掲書、278–279 頁などに示される通りである。

60）Derin Terzioğlu, "Sufi and dissident in the Ottoman Empire: Niyāzī-i Mişrī (1618–1694)," Ph. D. diss, Harvard University, 1999, p. 369.

61）*Ibid.*, p. 369.

3-2.　ムスリーの著作に表れる存在一性論

イブン・アラビーの存在一性論の影響はムスリーの著作のなかにも顕著に表れる。

1068/1657年頃にアラビア語で著された『玉座の転回』（*al-Dawra al-'Arshīya*）には、イブン・アラビーの『叡智の台座』や『マッカ啓示』のほか、弟子のクーナウィー（d. 672/1274, トルコ語ではKonevîと呼ばれる）、ベドレッディンの『霊感』（*Vâridât*）の注釈者かつナクシュバンディー教団のシャイフであるモッラー・イラーヒー（Mollâ İlâhî, d. 896/1490–1）、モッラー・フェナーリー（Mollâ Fenârî, d. 834/1431）などの著作の影響が指摘されている[62]。

ムスリーの思想の成熟期にあたる時期にアラビア語で著された『叡智の食卓』（*Mawā'id al-'Irfān*）は全部で71章（それぞれの章は、「食卓（mā'ida）」と呼ばれている）あり、68章のみオスマン語で書かれている。最初の58章は1083–4/1672–4年の間に書かれたものであり、残りは1103–5/1691–4年にかけて書かれたこの作品中には、アブー・ハニーファ（Abū Ḥanīfa, d. 150/767）やアブー・ハーミド・ガザーリー（Abū Ḥāmid al-Ghazālī, d. 505/1111）、タフターザーニー（Taftāzānī, d. 793/1390）、ダウワーニー（Dawwānī, d. 907/1501）ら法学者や神学者とともに、クーナウィー、ジャーミー（Jāmī, d. 894/1492）、ベドレッディンらイブン・アラビーの影響下にあるスーフィーたちの著作から引用が見られている[63]。内容は道徳的な教訓やクルアーンのスーフィズム的解釈、スーフィーの修行論などを含むものであり、それらが倫理的（ahlâkî）な問題として強調される[64]。

オスマン語で著された『ハサン・フセイン論考』（*Risâle-i Hasaneyn*）[65]は、ハサンとフセイン[66]について論じたものである。ムスリーは預言者性を内的（bâtın）と外的（zâhir）に分け、前者に無二の存在として預言者ムハンマドを当てはめ、そして外的な預言者性を預言者職によって、立法者としての預言者性（Nübüvvet-i Teşrîye）と真知をもたらす者としての預言者性（Nübüvvet-i Tarifîye）として分類した上で、後者にハサンとフセインが帰するものであると説明する[67]。預言者性に対する聖者性の優位という理論はイブン・アラビー思想のうちに知られるものであり、その根拠となる預言者性の2つの区分がもとになっていることは明白である[68]。なお、ムスリーのこの理論は同じハルヴェティー教団に属するメフメト・ナズミー（Muhammed Nazmî, d. 1112/1700）やイブン・アラビー学派の一人として著名なイスマイル・ハック・ブルセヴィー（İsmail Hakkı Bursevî, d. 1137/1725）によって厳しく批判されており[69]、そしてカドゥザーデ派の運動の標的となった原因のひとつであるとしてもよく説明される[70]。

さらに、オスマン語の著作である『存在一性論考（愛する者たちへの贈り物）』（*Risâle-i Vahdetü'l-Vücûd*（*Tuhfetü'l-Uşşâk*））は、ディーヴァーンや他の短いリサーレのエッセンスを取りだし、

62）*Ibid.*, p. 370.

63）*Ibid.*, pp. 370–371.

64）Niyâzî-i Muhammed Mısrî, *Mawâidu'l-İrfan: İrfan Sofraları*, çev: Süleymen Ateş, İstanbul: Yeni Ufuklar Neşriyat, 1971, p. 7.

65）Hazret-i Pîr Muhammed Niyâzî-i Mısrî, *Risâle-i Haseneyn*, haz: Aru Meral, İstanbul: Revak Kitabevi, 2012に現代トルコ語訳版と転写版がコメント付きで収録されている。

66）ハサンは第4代カリフのアリーとムハンマドの娘ファーティマとの間の息子であり、フセインはその弟である。

67）Doğramacı, *op. cit.*, pp. 95–96.

68）イブン・アラビーの聖者論については、竹下政孝「預言者と聖者」竹下政孝（編）『イスラームの思考回路（講座イスラーム世界4）』、栄光文化研究所、1995年、199–201頁を参照した。

69）Öcalan, *op. cit.*, pp. 276–277.

70）これに対して、Aşkarはムスリーが流罪に処された原因は、彼の思想の問題点ではなく、第一に当時の反スーフィー的な風潮、第二に反政治的発言に拠るところが大きいと主張している（Mustafa Aşkar, "Tarikat-Devlet İlişkisi, Kadızâdeli ve Meşâyıh Tartışmaları Açısından Niyazî-i Mısrî ve Döneme Etkileri," *Tasavvuf* 1, 1999, p. 80）。

存在一性論の立場から真理（hakîkat）について明快に論じたものである[71]。クルアーンやハディース、トルコ語やペルシア語の詩が随所に引用される[72]。

3-3. ムスリーの思想研究について

これまで述べてきたように、先行研究ではトルコ文学研究としてのディーヴァーン研究が最も多く、それに次いで、ムスリーの日記や聖者伝などの歴史的資料をもとにした研究や17世紀のオスマン朝社会においてドラマチックな生涯を送ったムスリーの人物像に即した歴史研究がある。どの研究においても、彼がイブン・アラビーの思想潮流に並ぶ人物であったことは前提としてふれられているものの、一人の思想家としてのムスリーの人物像に着目し、彼がいかに存在一性論を展開したかということを主眼にした研究はほとんどない。

ムスリーの思想研究を試みた数少ないもののうち、2002年のAşkarによる論文[73]と2012年のCeyhanによる論文[74]は、それぞれ「人間（insân）」と「真知（marifet）」ということを問題にしており、それらに関して存在一性論の立場からムスリーがどのように論じたかを主題としている。Ceyhanは自ら『存在一性論考』を全訳し、ムスリーによる「知」の分類やタウヒード体験（神との合一）の段階、ムスリーによるムルシド（訓導する者）の必要を説いた箇所を取り上げており、思想研究として大変意義のある研究に数えられる。しかし、いずれも主題はスーフィズム思想研究の枠内でよく論じられてきたテーマながら、ムスリーの思想展開の独自性や意義づけは充分に考察されていない。ニヤーズィー・ムスリーという人物がイブン・アラビー学派の思想家たちのうちで、どのように位置づけられるのかについては今後慎重に議論される必要性があるだろう。

4. 今後の研究の展望

本稿では、広くオスマン朝期スーフィズムに始まり、次に17世紀のオスマン朝社会におけるスーフィズムに焦点を当て、それらの研究動向を概観した。そして、ニヤーズィー・ムスリーという、17世紀を代表するスーフィーに関して、その研究動向や生涯、著作に関して紹介した。日本においても、従来のイスラーム思想研究の伝統においても、オスマン朝期のスーフィズム研究は新たな分野である。その中心地であるトルコにおいても、思想研究の立場から見れば、先行研究の数はまだ多いとは言えない。ムスリーに関しても同じことがあてはまるのは、先にも述べた通りである。

17世紀はカドゥザーデ派の運動に特徴づけられるように、「正統」か「異端」かという議論が活発に行われた時代であった。そのような時流にあって、ムスリーはイブン・アラビー、その後のイブン・アラビー学派の伝統を受け継ぐ形で存在一性論を奉じ、人間の究極的な目的やそのための修行について論じた人物である。ズィクルやデヴラーンが公的に禁じられた後もそれらの実践を継続し、はばかることなく政権批判を繰り返した。そのために時代の波に飲まれるかのように、生涯の最期をリムニ島で迎えることとなった。しかし、ムスリーの思想はハルヴェティー教団の支教団として生まれたムスリー教団や後代のスーフィーたちによって受け継がれ、彼の残した作品は今日においても多くの人々に親しまれ続けている。これまでの研究では、文学研究としてのディーヴァー

71）Semih Ceyhan, “Niyâzî-i Mısrî’nin Tuhfetü’l-Uşşâk Adlı Eserinde Mârifet,” haz: Ahmet Ögke, *Elmalı’da İlmî ve İrfânî Eğitim Geleneğimiz*, Antalya: Akdeniz Kültür ve İletişim Kulübü Derneği, 2012, p. 80.

72）Hazret-i Pîr Muhammed Niyâzî-i Mısrî, *Vahdetnâme*, haz: Arzu Meral, İstanbul: Revak Kitabevi, 2013, p. ii.

73）当論文でAşkarは『叡智の食卓』をもとに、ムスリーによる「人間」論を紹介している（Mustafa Aşkar, “The Sufi Understanding of Human in the Case of Niyazî-i Mısrî,” *Tasavvuf* 9, 2002, pp. 93–118）。

74）Ceyhan, *op. cit.*, pp. 80–136.

ン研究とムスリーの足跡を正確に特定しようとする歴史研究が主であったが、ムスリーの思想展開の解明を目的とした思想研究が必要である。それは、ムスリーのオスマン朝におけるイブン・アラビー学派としての位置づけやイスラーム思想史上の意義づけをなすためであるとともに、オスマン朝におけるスーフィズムの思想研究のさらなる発展に寄与するためである。ほぼ手つかずのまま残っているムスリーの多数のリサーレを分析するほか、彼の著作のみならず前代との比較や後代への影響なども加味しながら、存在一性論者としてのムスリーに焦点を当てた思想研究を行うことを今後の展望としたい。

5. 参考文献（引用文献及び関連先行研究リスト）

＜日本語＞

ダニシマズ, イディリス 2007「アナトリア・スーフィズム論の射程――トルコにおけるスーフィズム研究を中心に」『イスラーム世界研究』1(2), pp. 314–332.

竹下政孝 1995「預言者と聖者」竹下政孝（編）『イスラームの思考回路（講座イスラーム世界 4）』栄光文化研究所, pp. 199–201.

東長靖（編）2012『オスマン朝思想文化研究――思想家と著作』, 京都大学イスラーム地域研究センター.

東長靖・今松泰 2016『イスラーム神秘思想の輝き――愛と知の探究』山川出版社.

東長靖・中西竜也（編）2010『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター.

三沢伸生 1992「オスマン朝治下のアナトリアの都市――東アナトリアのマラティア地域の研究から」『イスラム世界』37/38, pp. 61–84.

山本直輝 2015「イマーム・ビルギヴィーのスーフィズム観」『イスラーム世界研究』8, pp. 225–235.

＜トルコ語＞

Akarca, Halid. 1952. “Niyazî-i Mısrî, Hayatı, Divanın Tahlili ve Tenkitli Neşri,” Lisans Tezi, İstanbul University.

Aşkar, Mustafa. 1997. “Mehmet Niyazi-i Mısri el-Malati Hayatı, Eserleri ve Tasavvuf Anlayışı,” Doktora Tezi, Ankara Üniversitesi.

———. 1998. *Niyazî-i Mısrî ve Tasavvuf Anlayışı*. Ankara: Kültür Bakanlığı.

———. 1999. “Tarikat-Devlet İlişkisi, Kadızâdeli ve Meşâyıh Tartışmaları Açısından Niyazî-i Mısrî ve Döneme Etkileri,” *Tasavvuf* 1, pp. 49–80.

———. 2007. “Niyâzî-i Mısrî,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, cilt. 33, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü, pp. 166–169.

———. 2011 (2004). *Niyazî-i Mısrî: Hayatı, Eserleri, Görüşleri*. İstanbul: İnsan Yayınları.

Bağış, Orhan. 1996. “Niyazi-i Mısri Divanın’da Din ve Tasavvuf,” Yüksek Lisans Tezi, Ankara Üniversitesi.

Baykal, Lütfi. 1985. “Bursevî ve Mısri’nin Risalelerinde Yer Alan Vahdaniyet Anlayışı,” Yüksek Lisans Tezi, Marmara Üniversitesi.

Beki, Kamil. 1997. “İbrahim Rakım Efendi ve Vakıatı Niyazi-i Mısri,” Yüksek Lisans Tezi, Uludağ Üniversitesi.

Bilginer, Sadettîn. 1977. *Allah ve İnsan*. İstanbul: Sena Matbaası.

Bilgiseven, Âmiran Kurtkan. 2010. *Büyük Türk-İslâm Düşünürü Niyâzî-i Mısrî’den Esintiler*. İstanbul: H Yayınları.

Bilkan, Ali Fuat. 2005. “XVII Yüzyıllarda Medrese ve Tekke Mücadelesinin Osmanlı Şiirine Yansıması,” *Osmanlı Araştırmaları Dergisi* 26, pp. 119–132.

Ceyhan, Semih. 2012. “Niyâzî-i Mısrî’nin Tuhfetü’l-Uşşâk Adlı Eserinde Mârifet,” haz: Ahmet Ögke, *Elmalı’da İlmî ve İrfânî Eğitim Geleneğimiz*, Antalya: Akdeniz Kültür ve İletişim Kulübü Derneği, pp. 80–136.

Çakmak, Muharrem. 2016. “Niyazî-i Mısrî’nin ‘Etvâr-ı Seb’a’ adlı Risâlesi’nde Seyr ü Sülûk’un Evrelerinde Görülen Rüyâ/Vâkıât,” *Tukish Studies* 11(5), pp. 136–158.

Çaylıoğlu, Abdullah. 1994. “Niyazi-i Mısri Hazretleri’nin Gazellerine Yapılan Şerhler,” Yüksek Lisans Tezi, Marmara Üniversitesi.

———. 1999. *Niyâzî-i Mısrî Şerhleri*. İstanbul: İnsan Yayınları.

Çeçen, Halil. 1992. “Niyazî-i Mısrî’nin Hatıralar (İnceleme-Metin-Sözlük),” Yüksek Lisans Tezi, Dicle Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü.

Çift, Salih. 2004. “Bursa’da Bir Mısrî Dergâh ve Son Postişîni: Seyyid Baba Tekkesi ve Şeyh Sâbit Efeindi,” *Uludağ Üniversitesi İlahiyat Facültesi Dergisi* 13(2), pp. 197–214.

Demirli, Ekrem. 2015. *Şair Sûfîler: Mevlana, Yunus Emre ve Niyazi-i Mısrî Üzerine İncelemeler*. İstanbul: Sufi Kitap.

Doğan, Eşref. & Hasan Çelik. 2015. “Niyazî-i Mısrî’nin Tasavvuf ve Ehl-i Beyt Anlayışı,” *Türk Kültür ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 76, pp. 146–164.

Doğramacı, Baha. 1988. *Niyazî-i Mısrî Hayatı ve Eserleri*. Ankara: Kadıoğlu Matbaası.

Dülger, Yusuf. 1998. “Ahmed b. Muhammed et-Tûsî el-Gazzâlî ve Niyâzî-i Mısrî’nin Semâ Risâleleri,” Yüksek Lisans Tezi, Marmara Üniversitesi.

Emre, M. Efdal. 2015. *Niyâzî-i Mısrî Dîvânı ve Şerhi*. İstanbul: Gelenek Yayıncılık.

Enfî Hasan Hulûs Halvetî. 2016 (2014). *Tezkiratü’l-Müteahhirîn: Xvı. Xvıı. Asırlardda Yaşayan Velîler ve Deliler*. haz: Mustafa Tatcı & Musa Yıldız, İstanbul: H Yayınları.

Erdoğan, Kenan. 1993. “Niyazî-i Mısrî: Hayatı, Edebî Kişiliği, Eserleri ve Divânın Tenkitli Metni,” Doktora Tezi, Atatürk Üniversitesi.

———. 1998. *Niyazi-î Mısrî: Hayatı, Edebî Kişiliği, Eserleri ve Divanı (Tenkitli Metin)*. Ankara: Akçağ Yayınları.

———. 2003. “Şiir-Efsane-Menkıbe İlişkisi ve Niyâzî-i Mısrî’nin Menkıbelerine Göre Bazı Şiirlerinin Hikâyesi,” *Sosyal Bilimler* 1, pp. 37–52.

Gölpınarlı, Abdüllbâki. 1931. *Melâmilik ve Melâmiler*. İstanbul: Devlet Matbaası.

———. 1966. “Niyazi,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, cilt. 9, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, İslâm Ansiklopedisi Genel Müdürlüğü.

———. 1972. “Niyazî-i Mısrî,” *Şarkiyat Mecmuası* 7, İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Basımevi, pp. 183–226.

Günal, Özkan. 2015. *Vahdet Deryası 1: Niyâzî-i Mısrî Divan Yorumları*. Bursa: Emek Yayınevi.

Gürel, Şevket (haz.) 2001. *Pir Ümmi Sinan Hazretleri Divanı*. İstabul: Bayrak Matbaası.

Kadıoğlu, İdiris. 2008. “Niyâzî-i Mısrî’nin Tehîdindeki Tasavvufî Kelime Örüntüsünün Yorumu ve Şiirin Tahlili,” *Electronik Sosyal Bilimler Dergisi* 24, pp. 152–170.

Kara, Mustafa. 1985. “Mezhepler ve Tarikatlar,” *Tanzimat’tan Cumhuriyet’e Türkiye Ansiklopedisi* 4, İletişim

Yayınları, pp. 977–994.

———. 1993. *Bursa'da Tarikatlar ve Tekkeler II*. Bursa: Uludağ Yayınları.

———. 1994. *Niyazi-î Mısrî*. Ankara: Türkiye Dinayet Vakfı Yayınları.

———. 2002. *Metinlerle Günümüz Tasavvuf Hareketleri*. İstanbul: Dergâh Yayınları.

———. 2005. *Metinlerle Osmanlı Tasavvuf ve Tarikatlar*. İstanbul: Sır Yayıncılık.

Karahan, Abdülkadir. 1980. "Kendi Elyazısı Hatıralarına Göre N. Mısrî'nin Bazı Mistik Görünüşleri," *Türkiyat Mecmuası* 19, pp. 93–98.

Kavruk, Hasan (haz.) 2004. *Malatyalı Niyâzî-i Mısrî Hayatı, Sanatı, Eserleri ve Türkçe Şiirleri*. Malatya: Malatya Belediyesi Kültür Yayınları.

Küçük, Osman Nuri. 2010. "Niyazî Mısrî'nin (1027–1105/1618–1694) Seyr ü Sülûk Sürecine İlşkin Vakıâları ve Sâliklere Tavsiyeleri," (Reading paper), Kulun Niyâzı Mısrî Niyâzi's Başlıklı Uluslararası Mısrî Niyâzî Sempozyumu, Malatya.

Kılıç, Rüya. 2007. "Osmanlı Sûfîliğinde İbnü'l-Arabî Etkisi: XVII. Yüzyıldan Üç Sûfî," *Bilig* 40, pp. 99–118.

Konuk, Ahmed Avni. 1989–1992. *Fusûsu'l-Hikem Tercüllme ve Şerhi*. haz: Mustafa Tahralı & Selçuk Eraydın, İstanbul: Marmara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Yayınları.

Limnili Şeyh Abdî-i Siyâhî. 2014 (2010). *Limni'de Sürgün Bir Velî: Niyâzî-i Mısrî'nin Hâtıraları*. haz: Mustafa Tatcı, İstanbul: H Yayınları.

Memişoğlu, Erdem. 2003. *Ehli Beyt Aşkı ve Niyâzî (k.s.)*. Ankara: İmaj Yayınevi.

Mısrî, Şeyh Mehmed Şemseddin. 2010. *Niyazî-i Mısrî'nin İzinde Bir Ömür Seyahat: Dildâr-ı Şemsî*. haz: Mustafa Kara, Yusuf Kabakçı, İstanbul: Dergâh Yayınları.

Muslu, Ramazan. 2003. *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf (18.Yüzyıl)*. İstanbul: İnsan Yayınları.

Mustafa Lûtfî Efendi. 2013. *Bir Mısrî Şeyhinin Kaleminden Hazret-i Niyâzî-i Mısrî*. haz: Aliye Uzunlar, İstanbul: Revak Kitabevi.

Niyazî-i Mısrî. 1966. *El-Es'iletü Vel-Ecûbe (Sualler ve Cevaplar): Tasavvuf üzerindedir*. haz: Nazım Akkoyun, İstanbul.

———. 1967. *Tam ve Tekmil Niyazî Divanı*. İstanbul: Maarif Kitaphanesi ve Matbaası.

———. 1971. *Yunus Emre'den Tasavvufî Şiirler*. Sadeleştiran: Alif Pamuk, İstanbul: Pamuk Yayıncılık.

———. 1971. *Mawâidu'l-İrfan: İrfan Sofraları*. çev: Süleymen Ateş, İstanbul: Yeni Ufuklar Neşriyat.

———. 1976. *Dîvânı Şerhi Tam Dîvân ile birlikte*. açıklamalar: Seyyid Muhammed Nûr, Hacı Maksud Hulûsi, İstanbul: Mahmut Sadettin Bilginer.

———. 1980. *Tasavvuf ve Şeriat Hakkında Sualler ve Cevaplar*. sadeleştiren: Ubeydullah Küçük, İstanbul: Bedir Yayınevi.

———. 1999. *Yunus Emre'nin" Çıktım Erik Dalına" Gazeli'nin Şerhi*. derleyen: Talip Hafızoğlu, İzmir.

———. 2012. *Risâle-i Haseneyn*. haz: Aru Meral, İstanbul: Revak Kitabevi.

———. 2013. *Vahdetnâme*. haz: Arzu Meral, İstanbul: Revak Kitabevi.

———. 2014 (2006). *Niyâzî-i Mısrî'nin Hatıraları*. haz: Halil Çeçen, Dergâh Yayınları.

———. 2015. *Niyâzî-i Mısrî Halvetî Dîvân-ı İlâhiyât.* haz: Mustafa Tatcı, İstanbul: H Yayınları.

Niyazî Mısrî, İsmail Hakkı Bursevî & Şeyhzâde. 2012. *Çıktım Erik Dalına: Yunus Emre'nin Bir Şiirinin Üç Şerhi*. İstanbul: Büyüyenay Yayınları.

Ocak, Ahmet Yaşar. 1999 (1998). *Osmanlı Toplumunda Zındıklar ve Mülhidler (15.–17. Yüzyıllar)*, İstanbul:

Tarih Vakıfı.

——— (haz.) 2014 (2005). *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf ve Sufiler Kaynaklar-Doktrin-Ayin ve Erkan-Tarikatlar-Edebiyat-Mimari-Ekonografi-Modernizm*. Ankara: Sarıyıldız Basımevi.

Oral, Hüseyin. 1987. *Niyazî-i Mısrî Hayatı, Tefekkürü, Eserleri*. İstanbul: Yeni Asya Yayınları.

Öcalan, Hasan Basri. 2000. *Bursa'da Tasavvuf Kültürü (XVII. Yüzyıl)*. Bursa: Gaye Kitabevi.

Öngören, Reşat. 2000. *Osmanlılar'da Tasavvuf: Anadolu'da Sûfîler, Devlet ve Ulemâ (XVI. Yüzyıl)*, İstanbul: İz Yayıncılık.

Özler, Nurten. 2004. "Tasavvufta Hızır Telakkisi ve Niyâzî Mısrî'nin Hızır Risâlesi," Yüksek Lisans Tezi, Marmara Üniversitesi.

Öztelli, Cahit. 1977. "Niyazî (Mısrî)," *Türk Ansiklopedisi*, cilt. 25, Ankara: MEB yayınları, pp. 296–298.

Özdamar, Mustafa. 2000. *Niyâzî Mısrî*. İstanbul: Kırk Kandil.

Öztürk, Özkan. 2015. *Siyaset ve Tasavvuf Osmanlı Siyasi Düşüncesinde Tasavvufun Tezahürleri*. İstanbul: Dergâh Yayınları.

Pekolcay, Neclâ. & Emine Sevim, 1991. *Yunus Emre'nin Şahiyeti ve Yunus Emre Şerhleri Yunus Emre'nin Bir Eseriyle İlgili Şerhlerin Yazmaları*. Ankara: Kültür Bakanlığı.

Seyyid Muhammed Nûru'l-Arabî. 2014. *Niyâzî-i Mısrî Divanı Şerhi. haz: Mustafa Tatcı& İbrahim Özay*, İstanbul: H Yayınları.

Şimşek, Selami. 2008. "Türk Edebiyatında İbnü'l-Arabî Methiyeleri Üzerine Bir İnceleme," *Tasavvuf* 21, pp. 389–425.

Tahralı, Mustafa. 1994. "Muhyiddin İbn Arabî ve Türkiye'ye Te'sirleri," *Kubbealtı Akademi Mecmuası* 23(1), pp. 26–35.

Tatcı, Mustafa. 1983–4. "Niyâzî-i Mısrî, Hayatı, Düşünceleri, Bir Risalesi," Lisans Tezi, Uludağ University.

———. 1988. "Niyazî-i Mısrî'nin Tasavvufî Bir Risâlesi: Şerh-i Esmâ-i İsnâ Aşere," *Türk Yurdu* 8(12), pp. 22–32.

———. 1989. "Niyazî-i Mısrî'nin Tasavvufî Bir Tabirnamesi," *Türk Folklor Araştırmaları*, Ankara, pp. 85–96.

———. 2012 (2010). *Burc-ı Belâda Bir Merd-i Hudâ Niyâzî-i Mısrî*. İstanbul: H Yayınları.

———. 2013. *Malatya'nın Gönül Sultanı Niyâzî-i Mısrî*. Malatya: Malatya Kitaplığı.

———. 2015 (2012). *Yûnus Emre Yorumları; İştin Ey Yârenler*. İstanbul; H Yayınları,

Tatcı, Mustafa & Mevlüt Çam (haz.) 2015. *Arşiv Belgelerine Göre Niyâzî-i Mısrî ve Dergâhları*. Ankara: Türk İşbirliği ve Koodinasyon Ajansı Başkanlığı.

Tenik, Ali. 2009. "Türk Mutasavvıf Şâirlerinde Varlık Anlayışı Eşrefoğlu Rûmî, Niyazî-i Mısrî ve Ahmed Kuddûsî Örneği," *Tasavvuf İlmi ve Akademik Araştırma Dergisi* 23, pp. 471–509.

Terzioğlu, Derin. 2012. "Mecmûa-i Şeyh Mısrî: On Yedinci Yüzyıl Ortalarında Anadolu'da Bir Derviş Sülûkunu Tamamlarken Neler Okuyup Yazdı?" haz: Hatice Aynur, Müjgân Çakır, Hanife Koncu, Selim S. Kuru, Ali Emre Özyıldırım, *Eski Türk Edebiyatı Çalışmaları VII: Mecmûa: Osmanlı Edebiyatının Kırkambarı*, İstanbul: Turkuaz Yayınları, pp. 291–321.

Tuğruluca, Orhan. 2010. *Malatyalı Niyazî-i Mısrî Hayatı ve Düşünceleri*. İstanbul: n.p.

Ulucan, Mehmet. 2009. "Niyazî-i Mısrî'nin Şiirlerinde Varlık Anlayışı," *Fırat Üniversitesi Sosyal Bilimler Dergisi* 19(1), pp. 31–41.

Yakıcı, Ali. 1985. "Niyazi-i Mısri'nin Divan-ı İlahiyatı'ı," Yüksek Lisans Tezi, Gazi Üniversitesi.

Yıldız, Musa. 2010. *Niyâzî Mısrî Kasîde-i Bürde Tesbî'i*. İstanbul: H Yayınları.

Yılmaz, Kadriye & Kamile Çetin. 2007. "Rüyalar ve Niyazî-i Mısrî'nin Ta'bîrâtü'l-Vâkı'ât Adlı Eserinde Rüyaların Dili," *Turkish Studies: International Periodical for the Languages, Literature and History of Turkish or Turkic* 2(4), pp. 1066–1076.

Yılmaz, Necati. 2001. *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf: Sûfîler, Devlet ve Ulemâ (XVII. Yüzyıl)*, İstanbul: Osmanlı Araştırmaları Vakfı.

Yücer, Hür Mahmut. 2003. *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf (XIX. Yüzyıl)*, İstanbul: İnsan Yayınları.

Zorlu, Ilgaz. 1998. "Sabetaycılık ve Osmanlı Mistisizmi," *Evet, Ben Selamikliyim: Türkiye Sabetaycılığı*, Istanbul: Belge, pp. 40–45.

（著者未詳）. 1992. "Niyâzî-i Mısrî," *Evliyalar Ansiklopedisi*, cilt. 9, İstanbul: Türkiye Gazetesi, pp. 323–328.

＜ヨーロッパ諸語＞

Aşkar, Mustafa. 2002. "The Sufi Understanding of Human in the Case of Niyazî-i Mısrî," *Tasavvuf* 9, pp. 93–118.

Babinger, Franz. 1993. "Niyazi," *The Encyclopedia of Islam (new edition)*, vol. 10, Leiden: E.J. Brill, p. 65.

Ballanfat, Paul. 2010. "Nîyâzî Mısrî : l'Égypte, station mystique pour un soufi turc du XVIIe siècle," Rachida Chih et Catherine Mayeur-Jaouen (eds.), *Le soufisme à l'époque ottomane XVIe-XVIIIe siècle*, Cairo: Institut Français d'Archéologie Orientale, pp. 249–273.

———. 2012. *Messianisme et sainteté : les poèes du mystique ottoman Niyâzî Misrî (1618–1694)*. Paris: Harmattan.

———. 2014. "L'idéologie d'état concurrencée par son interprétation: les Melāmī-Hamzevī dans l'Empire Ottoman," Orkhan Mir-Kasimov (ed.), *Unity in the Diversity: Mysticism, Messianism and the Construciton of Religious Authority in Islam* (Islamic History and Civilization: Studies and Texts, 105), Leiden: Brill, pp. 307–327.

Chodkiewicz, Michel. 1991. "The Diffusion of Ibn 'Arabi's Doctrine," Cecilia Twinch (tr.), *The Journal of the Muhyiddin Ibn 'Arabi Society* 9, pp. 36–57.

———. 2005. "La réception de la doctorine d'Ibn 'Arabī dans le monde ottoman," Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-Architecture Literature and Fine Arts-Modernism*, Ankara: Sarıyıldız Basımevi, pp. 97–120.

Clayer, Nathalie. 1994. *Mystiques état et société : Les Halvetis dans l'aire balkanique de la fin du XVe siècle à nos jours*. Leiden: E. J. Brill, pp. 177–178, 267–268.

Clayer, Nathalie, Alexandre Popović & Thierry Zarcone (eds.). 1998. *Melâmis-Bayrâmis : études sur trois mouvements mystiques musulmans*. Istanbul: The ISIS Press.

Curry, John J. 2010. *The Transformation of Muslim Mystical Thought in the Ottoman Empire: The Rise of the Halveti Order, 1350–1650*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Çavuşoğlu, Semiramiş. 1990. "The Ḳāḍīzādeli Movement: An Attempt of Şerī'at-minded Reform in the Ottoman Empire," Ph. D. diss. Princeton University.

Ernst, Carl. 1996. *Words of Ecstasy in Sufism*. Albany: SUNY Press.

Fenton, Paul B. 1988. "Shabbatay Şebi and his Muslim Contemporary Muhammad an-Niyazi," David R. Blumenthal (ed.), *Approaches to Judaism in Medieval Times* 3, Atlanta, Georgia: Scholars Press, pp. 81–88.

———. 2005. “Christians and Jews in Niyazi Mısrî’s Writings,” *Uluslararası Bursa Tasavvuf Kültürü Sempozyumu IV*, vol. IV, pp. 149–164.

Gordlevsky, WL. 1926. “Zur Frage über die “Dönme” (Die Roile der Juden in den Religionssekten Vorderasiens,” *Islamica* 2(2), Leipzig, pp. 200–218.

Gordlevskij, V. A. 1929. “Tarikat Misri Niyazi,” *Dokladi Akademii Nauk SSSR*, pp. 153–163.

Glock, Irmgard. 1951. “Niyāzī al-Miṣrī: Ein Beitrag zur islamischen Mystik Kleinasiens im 17. Jahrhundert,” Ph. D. diss. Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn.

Hirtenstein, Stephen. 1999. *The Unlimited Mercifier: The Spiritual Life and Thought of Ibn ‘Arabi*. Oxford & Ashland: Anqa Publishing and White Cloud Press.

———. 2012. “Malatyan Soil, Akbarian Fruit from Ibn ‘Arabi to Niyazi Misri,” *Journal of Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society* 51, pp. 103–132.

Inalcik, Halil. 1973. *The Ottoman Empire: The Classical Age 1300–1600*. Norman Itzkowitz & Colin Imber (tr.), New York & Washington: Weidenfeld & Nicolson.

Kafadar, Cemal. 1989. “Self and Others: The Diary of Dervish in Seventeenth-Century Istanbul and First-Person Narratives in Ottoman Literature,” *Studia Islamica* 69, pp. 121–150.

Karataş, Hasan. 2014. “The Ottomanization of the Halveti Sufi Order: A Political Story Revisited,” *Journal of the Ottoman and Turkish Studies Association* 1(1–2), pp. 71–89.

Lowry, Heath W. 2011. *Historical Vestiges of Nîyâzî Mısrî’s Presence on the Island of Limnos (Nîyâzî Mısrî’nin Limnos Adası’nda Bulunan Tarihi İzleri)*. Kıvan Tanrıyar (tr.), Istanbul: Bahçeşehir University Press.

Matzari, Olga. 2014. “The Türbe and Tekke of Niyazi Misri in Lemnos,” Evangelia Balta, Georgios Salakidis & Thoharis Stavrides (eds.), *Festschrift in Honor of Ioannis P. Theocharides: Studies on Ottoman Cyprus* vol. 2, Istanbul: The ISIS Press, pp. 333–362.

Ocak, Ahmet Yaşar (ed.). 2005. *Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-Architecture Literature and Fine Arts-Modernism*. Ankara: Sarıyıldız Basımevi.

Rachida Chih et Catherine Mayeur-Jaouen (eds.). 2010. *Le soufisme à l’époque ottomane XVIe-XVIIIe siècle*. Le Caire: Institut Français d’Archéologie Orientale.

Sells, Michael A. 1994. *Mystical Languages of Unsaying*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Sindall, Jill. 2014. “Jews in the Ottoman Empire Part 1,” *Turkish Area Studies Review* 23, pp. 40–44.

———. 2014. “Jews in the Ottoman Empire Part 2,” *Turkish Area Studies Revies* 24, pp. 39–43.

Tahralı, Mustafa. 1999. “A General Outline of the Influence of Ibn ‘Arabî on the Ottoman Era,” *The Journal of Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society* 26, pp. 43–54.

Terzioğlu, Derin. 1999. “Sufi and Dissident in the Ottoman Empire: Niyāzī-i Miṣrī (1618–1694),” Ph. D. diss, Harvard University.

———. 2002. “Man in the Image of God in the Image of the Times: Sufi Self-Narratives and the Diary of Niyāzī-i Mıṣrī (1618–94),” *Studia Islamica* 94, pp. 139–165.

Uçman, Abdullah. 2005. “The Theory of the *Dawr* and the *Dawrīyas* in Ottoman Sufi Literature,” Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-Architecture Literature and Fine Arts-Modernism*, Ankara: Sarıyıldız Basımevi, pp. 445–475.

Uludağ, Süleyman. 2005. “Basic Souces for Mystical Thought in the Ottoman Period,” Ahmet Yaşar Ocak (ed.), *Sufism and Sufis in Ottoman Society: Sources-Doctrine-Rituals-Turuq-Architecture Literature and Fine Arts-Modernism*, Ankara: Sarıyıldız Basımevi, pp. 21–49.

Veinstein, Grilles. 2013. “Jews and Muslims in the Ottoman Empire,” Abdelwahab Meddeb & Benjamin Stora (eds.), *A History of Jewish-Muslim Relations: From the Origins to the Present Day*, Princeton & Oxford: Princeton University Press, pp. 171–195.

Zilfi, Madeline C. 1986. “The Kadizadelis: Discordant Revivalism in Seventeenth-Century Istanbul,” *Journal of Near Eastern Studies* 45(4), pp. 251–269.